

「2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博) ～いのち輝く未来社会のデザイン～」

協調強化に向け 進捗と重要性を確認

「2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)」開催まで1年を切った。未来社会共創に向けた一層の協調強化を目的に、進捗を確認するとともに、テーマ事業の見どころと展望についてプロデューサーを務める落合陽一氏と意見を交わした。



大屋根リングを中心とした会場イメージ

(提供:2025年日本国際博覧会協会)

万博の概要と進行状況



高科 淳

2025年
日本国際博覧会協会
副事務総長
内閣官房国際博覧会
推進本部 元事務局次長

■ 海外パビリオンのタイプB・Cは ■ 完成が近い

2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)は来年4月13日から半年間、大阪の夢洲で開催される。会場は埋め立て人工島で、会場以外の残り半分はIR予定地となっている。現在、隣の咲洲から地下鉄を延伸し夢洲に新駅を造る工事も進行中で、1月開業を予定している。

約160カ国の海外パビリオンは大きなリングの中に立ち並ぶ構造だ。文化も言葉も価値観も多様な国々がリングの中でつながることに意義があると考えている。リングは1周2km、直径600m程度で、その直径は東京スカイツリーの高さと同じだ。リングの高さは12～20mで、上に登れば明石海峡大橋や関西空港、六甲山系などが一望できる。

リングはすでに8～9割程度つながっている。このリングの外に並ぶ民間企業のパビリオンの建設も順調に進んでおり、早いものは11月には完成する予定だ。一方、リング中央には大阪府内から1,500本の木を移植して森を造る。うち500～600本程度を植樹した。

また、海外パビリオンの完成の遅れ

が指摘されているが、161カ国のうち100カ国以上は博覧会協会が造るタイプB・Cに該当し、7月には完成予定だ。残り50数カ国は各国自身がゼネコンと契約して造るタイプAで、40カ国程度の建設が始まっている。残り10カ国程度については政府と共に完成をサポートしているところだ。

各国とも続々とパビリオンの構想発表会を行い、着工も進んでいる。どの国もかなり気合いの入ったデザインで、館内の展示内容も充実していることが各国とのコミュニケーションを通してよく分かる。昨年11月に各国の参加準備会合を開催、今年も6月に奈良で開催予定だ。各国からさまざまな質問が寄せられ、具体的な議論がされている。

■ 会場全体を未来社会の ■ ショーケースに

「シグネチャープロジェクト(いのちの輝きプロジェクト)」は中核となるテーマ事業で、万博の顔となるプロジェクトだ。テーマ事業プロデューサー8人が主導するパビリオンを起点として展開する。

企業パビリオンについては、参加予約の始まる秋に向けてさまざまなアイデアが出されているようだが、その内容は明らかになっていないものも多い。プロモーションを担当する立場として、もう少し内容を明かしてくれるようお願いしているところだ。その他、日本館、大阪ヘルスケアパビリオン、関

西パビリオン、ウーマンズパビリオンなども展示内容を充実させるべく取り組んでいる。ウーマンズパビリオンのファサードはドバイ万博の日本館をリユースしたもので、SDGsに配慮した。

会場全体を未来社会のショーケースにしようと、さまざまな取り組みを進めている。その一例として、会場への移動バスはEVでの自動走行と走行中給電などを組み合わせる。中之島からの海上アクセスには水素客船を使用する。何かと話題の空飛ぶクルマも有人飛行を実現すべく、関係者一同準備を進めている。

イベントに関しては、東京2020パラリンピック閉会式のショーディレクターを務めた小橋賢児プロデューサーが中心となって準備を進めている。業界協力のイベントとしてはウォータープラザにおいて、水と空気と光と映像と音楽が織りなす水上ショーをサントリーとダイキンの協力で準備している。

また、各国のナショナルデーにもさまざまなイベントやパレードを行う予定だ。国内の自治体を中心としたイベントや有名スターのライブ、テレビ番組とのコラボイベントなども順次発表していく予定である。

ありがたいことに、ボランティア2万人の募集に対して5万5,000人の応募があった。どれだけ採用できるか検討している。有償スタッフであるクルーにも、募集人数を大幅に上回る応募があり、うれしい悲鳴を上げている。

「いのちを磨く」 パビリオン



落合 陽一

2025年
日本国際博覧会協会
テーマ事業プロデューサー
ピクシーダストテクノロジーズ
代表取締役会長CEO

■ 自然と人間の間にデジタルの ■ 自由さで調和をもたらす

シグネチャーパビリオンは8人のプロデューサーが主導する八つのパビリオンで構成する。私が担当する「null²（ヌルヌル）」は「いのちを磨く」をテーマにしている。このパビリオンで最も重要なテーマは、デジタルが自然と一体化するデジタルネイチャーだ。

デジタルは当初、コンピューターなどの道具だったが、道具として目に入る仕組みが徐々に消滅し、最終的には波に磨かれた小石のように自然な形状になり、ついにはデジタルは自然と一体化するのではないかと、というのが伝えたいことだ。

なぜ、このようなことを考えているのか。例えば、義足にAIを入れたら歩けるようになるのか、目で見えるものや耳で聞こえるものがAIによってさまざまな言語に翻訳されるのかなど、今さまざまなプロジェクトに携わっている。人間と機械は近くなっている。そして音楽と知覚、聴覚、身体感覚などがデジタルを通じてどのように融合していくのか。音楽は映像になり、映像は言葉になる。言葉はやがて人間の形を取るようになるかもしれない。あらゆるものがコンピューターを通じて変換されたり形が変わったりするのではないかと。

人間もコンピューターの一つだと考えれば、人間も計算しているし植物も計算している。生きとし生けるものは全てが大切である、という考え方に基くと、人間だけの地球でも宇宙でもないだろう。計算で宇宙を捉え直すと

いう考え方は、仏教や神道を受け入れてきた多神教の日本では比較的捉えやすい。逆に、一神教の国では考えにくいだろう。このように計算で捉え直したとき、人間はどういった存在なのかを考える、これがコアな哲学だ。

こうした哲学をもって、さまざまに形状が変わっていくパビリオンをどう造るか。そこで私たちは「フィジカルの鏡」と「デジタルの鏡」を考えた。建物自体が鏡のような素材でできていて、伸びたり縮んだりしながら風景を捻じ曲げる。中に入ると人間がデジタルに変換されてデジタルヒューマンが作られ、それと会話できる。そんなパビリオンを造りたいと考えた。ショーケースの中にはギャラリーがある。そこに姿見を置き、自分の存在を映す。来場者は自分のコピーとなるデジタルヒューマンと対話することができる。

こうした考えの下、パビリオン全体を膜の構造にし、鏡が波立っているように見える外観を採用した。内部にはロボットアームが入っていて伸縮する。変形構造のパビリオンなので、万博終了後は膜を剥がしてロボットアームを撤収すればよい。サステイナブルな建造物だ。

■ デジタル化した自分を持ち帰る

レガシーとして私が残そうと思っているのは、この「もう1人の自分」をスマートフォンに入れて持ち帰るということだ。例えば今、皆さんがオンラインで買い物をしたデータや今まで送ったメールデータ、健康診断のデータな

ど、あらゆるデータはインターネット上に分散して存在する。自分のコピーの中にそういったデータを入れたらどうなるのか興味深い。

一番重要なことは、われわれ日本人一人ひとりが自分自身のデータを個々に持っているということだろう。各企業はそうした個人に向けて、それぞれ最適なサービスを提供するだろう。しかし、個人がデータをしっかり管理できるようになるかは別な問題だ。皆さんの趣味嗜好やどんなことを勉強してきたかなどのデータを主体的に自分が持っているという状況をどう作り出せるかが大切になる。

万博来場者は2,500万人程度といわれている。シグネチャーパビリオンに来館するのは40万~100万人ぐらいだろう。その人たちが自分のコピーのデータを持ち帰ることで、自分でデータをマネジメントするきっかけになる。

万博を通じて伝えたいことは、自然は計算機とみなすことができるし、計算機の中にも自然はあるということだ。さらにそれを通して、全てのものを大切にすること、命や自然を大きな目線で捉えることだ。こうしたテーマは日中韓を中心とするアジアをルーツとする考え方であり、おそらくアジア圏からしか出てこないものではないか。このテーマは、対立が目立ち、持続可能性が叫ばれる現在の地球にとって重要だと思う。人間以外にも計算機であり、それがカルチャーとつながっている。そういう前提に立って物事を考え直すことが大切であると伝えていきたい。



落合プロデューサーが「いのちを磨く『Null²』」をテーマにしたパビリオンの外観